

大門だより

No. 10

(469号)

荒川区立大門小学校

校長 野澤 一代

令和6年 2月 1日

大門小ホームページ

荒川区立大門小学校

検索

《本校の教育目標》 考える子 やさしい子 たくましい子

「本校の研究」

校長 野澤 一代



2月の季語。立春、早春、雪解け、残雪、猫柳、雛菊、ホウレンソウ、梅、鶯。まだまだ寒い日が続きますが、言葉は春へと近づいています。

今年度、本校は「主体的に学習に取り組む児童の育成～「対話したい!」と思える授業作り～」に取り組んできました。研究教科は各学年に任せ、年間8本の研究授業を行いました。

私が着任したのは6月が入学式の新型コロナウイルスによる臨時休校の最中でした。久しぶりに登校した児童は「なんで学校に行かなければいけないのか」という難解な疑問を抱えていました。そのとき、「学校に行く意義」を児童、教員と一緒に考えることから始めました。それが、この研究を始めたきっかけでした。

「主体的に学習に取り組むこと」はそう容易なことではありません。学習環境が整っている、指導する教員の準備ができている、学習する児童の心が学習に向かっているなど一つの学習でも揃わなければならない条件が複数あります。私たちはまず「児童の心を整える」ことを前提に「児童が学習に何を求めているか」「児童にどんな力を身に付けてあげればいいのか」を考え、学校でしかできない「対話」を軸に授業を展開しました。そして常に「自尊感情のふり幅」を根拠に児童を見取り、「児童の学習の振り返り」から「教員も振り返り」ました。

上記の「児童の心を整える」とは「自尊感情」「自己肯定感」を高めた状態にすると考えています。

自尊感情とは、「自分のできることでできないことなどすべての要素を包括した意味での『自分』を他者との関わり合いを通してかけがえのない存在、価値ある存在として捉える気持ち」であり、自己肯定感とは「自分に対する評価を行う際に、自分のよさを肯定的に認める感情」です。いわゆる、自分と言う人間は何物にも代えがたく、自分を大切に思うことを常に心にもってほしいということです。

その心を整えることを最優先し、教員が手だてを考え、学習に取り組ませることで、「つまづいてもいいんだ。次がんばろう。」「自分は自分。」「自分はまだまだやれる。」という気持ちを学習の意欲や学習の「振り返り」につなげていきたいのです。

学校の行事の挨拶のたびに、保護者の皆様へ「評価はしないでください。ただ、よくやったとほめてください。」「叱咤はいりません。激励のみで。」と話していたのもこの取組からです。いつもご協力ありがとうございます。

令和6年度は、この研究を研究発表と言う形で、荒川区内の教職員の皆様に参観していただき、ご指導、ご助言をいただきます。

来年度も大門小学校は、子供たちの健やかな心の成長と学力向上に努めてまいります。



※右上の絵は校長のイラストを図工専科の野口先生が描いてくれました。これから度々登場します。